



Title	モンゴル語の派生接尾辞-tu、-tai、-tanに関する研究
Author(s)	村木, 健路
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88122
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (村木 健路)	
論文題名	モンゴル語の派生接尾辞 -tu,-tai,-tan に関する研究
論文内容の要旨	
<p>当該の派生接尾辞の原義は「所属、所有」である。ただし、条件によっては「動作の結果継続」や「性質・状態」を表すこともある。「意味」に関しては、通時的変遷は見られない。通時的変遷が見られるのは「役割」である。</p> <p>現代モンゴル語では、-tu は定型表現を形成することに特化していて、それ以外の場合が -tai であるという「役割」の差異がある。使用頻度としては、-tai のほうが大きく上回っている。また、文法的機能としては、-tu は現代語では述語の位置には来ないという特徴がある。-tan は、集合名詞を形成する「役割」に特化している。</p> <p>13世紀のモンゴル語を代表する『元朝秘史』では、被限定詞もしくは主語の位置に来るのが男性であれば -tu、女性であれば -tai、複数であれば -tan という「役割」の差異が顕著に見られることは小沢によって考察済みである。筆者も検証したところ、「人」に関しては95%この原則が守られている。むしろ、問題にしなければならないのは、「人以外」に関してこの派生接尾辞がどのような現れ方をするかである。これについては、「人以外」は文法的に女性扱いされていたとする小沢説に疑義を挟まざるを得ない。小沢の言う通りであるならば、「人以外」は -tai で現れるはずであるが、その多くが -tu で現れるからである。筆者は、「人以外」については、-tu と -tai の間に「役割」の差異がない「自由交替可能な状態」であったと見る。ただし、「人以外」であっても単数と複数の違いは派生接尾辞の現れ方に如実に反映されていて、複数であれば -tan の形態で現れている。また、なぜ当該の派生接尾辞に性と数の呼応という現象が生じたのかも重要な問題である。『元朝秘史』のモンゴル語では、小沢によると優位者か劣位者かで動詞語尾に違いがあったとされている。さらに、同じく小沢によると男性か女性か複数かによる動詞語尾変化の体系も立証されている。そのようなことが出来る背後にあったのが、国の統一ではなかったかと筆者は推測する。すなわち、国を整える過程において言葉も身分関係や男女で使い分けようという流れが起こり、そうした風潮の中から、男性であれば -tu、女性であれば -tai ということが、いわゆる「男言葉、女言葉」のようなものではなく、文法的拘束事項として定まったのではあるまいか。</p> <p>『元朝秘史』で顕著に見られる当該の派生接尾辞の性と数による呼応は、小沢は「15～16世紀の蒙古語では消失」したとしている。しかし、17世紀のJy.『アルタン・トブチ』からは、必ずしも呼応の「消失」というデータは得られず、むしろまだそれが「保持」されていたと見るほうが適切である。Jy.『アルタン・トブチ』が『元朝秘史』の体系を継承することに専念していて、17世紀当時の体系を全く無視して書かれたからであるという見方もできなくはないが、筆者はここに書き言葉と話し言葉の乖離時期を想定したい。すなわち、話し言葉の体系では小沢の言うように呼応は「消失」した可能性が高いが、書き言葉の体系ではそれが一定期間「保持」されていたという見方もできるのではないか。ただし、当時の話し言葉の実情が分かる史料はないので、推定の域は出ない。</p> <p>中世モンゴル語西方言『ムカディマツト・アル・アダブ』においては、当該の派生接尾辞は -tu と -tan の二項の体系であって、-tai の形態は現れないという特徴がある。つまり、単数か複数かの別は派生接尾辞の形態に反映されるが、男女の別は反映されないのである。これについては、最も古い状態であると筆者が推定する -tu と -tai が「役割」の差がない「自由交替可能な状態」から、「役割」に差異がないのなら、二つあるのは経済的ではないという力が働いて -tai が消失したと判断する。</p> <p>中世モンゴル語東方言であっても、パスパ文字史料では、当該の派生接尾辞は -tu と -tan の二項の体系であって、-tai の形態は現れない。単数か複数かの別は派生接尾辞の形態に反映されている。これは、一見したところ西方言と同じ特徴であるように感じられる。しかし、-tai が現れない事情は全く異なる。『元朝秘史』と同時代かつ同地域である以上、-tai が存在していたことは間違いないのであって、意図的に -tai を避けて -tu のみを使用したと考えられる。</p> <p>18世紀の『アルタン・ハーン伝』では、-tu と -tai の間の性による呼応は全く感じられなくなっている。また、-tu が述語の位置に来ることが減少傾向にある点、-tan が複数に対する呼応が衰退し集合名詞形成の役割に特化し始めてい</p>	

る点でも、現代語の状態に向かっている。ただし、-tu のほうが依然として使用頻度は高く、この点では現代語とは異なる状態にある。

モンゴル系周辺言語について、ブリヤート語、カルムイク語、オイラト語、ダグル語、シラ・ユグル語、モンゴル語互助方言、モンゴル語民和方言、ドゥンシャン語、カンジャ語、バオアン語を通して当該の派生接尾辞概況を見ると、-tu と -tai の両方を持つのがもっとも多く5言語、次いで -tu のみ持つのが4言語、-tai のみ持つのが1言語であることから、-tuのほうが保持される傾向が強いことが分かる。

当該の派生接尾辞が『元朝秘史』では、性と数の呼応が見られることは上記の通り小沢によってすでに示されている。筆者も検証したところ、被限定詞もしくは主語が「人」の場合、95%が原則に適った現れ方になっている。本稿の考察によって明らかになったのは、

- (1) 『元朝秘史』で「人以外」に対してこの派生接尾辞が現れるとき、-tu と -tai の間に役割の差異はなく、自由交替可能な状態であった。また、使用頻度の点では -tuが -tai を大きく上回っている。ただし、-tan は「人以外」であっても「複数」に特化して使用されている。「単数」に使用されることはない。
- (2) -tu と -tai の間に役割の差異がないのは、『元朝秘史』以前の状態がそうであったからであると推測される。役割の差異のなかった二形態に対して、「-tu は男性、-tai は女性」という役割を付与したのは『元朝秘史』のモンゴル語からであり、その要因にはモンゴル国の統一という歴史的背景が関係していると考えられる。
- (3) 『元朝秘史』以後も、書き言葉では、呼応がむしろまだ保持されていると言ってよい時期がある。さらに時代が下ると、書き言葉においても性による役割の差異が消失するが、使用頻度の点では依然として -tuが -tai を大きく上回る状況が続いている。
- (4) -tu の<述語用法>は、18世紀には大幅に減少する。そして、現代モンゴル語では全く見られなくなっている。一方、-tan は、「複数に対する呼応」の役割から「集合名詞形成」の役割へ変遷する。現代モンゴル語では「集合名詞形成」の役割にほぼ特化している。
- (5) 現代モンゴル語の -tu,-tai の間には、-tu は結合度が強く一部の定型表現にのみ使用されるのに対して、-tai は結合度が弱く生産的に使用されるという差異が見られる。したがって、相互の交替は不可能であることのほうが多い。
- (6) モンゴル系周辺言語において -tu と -tai の状況を見ると、-tu のほうが-tai よりもよく用いられているが、これは中世以降のモンゴル語東方言が使用頻度の点で -tu が優勢であったことと無関係ではないと思われる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (村 木 健 路)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 塩谷 茂樹
	副 査 教授 岸田 文隆
	副 査 教授 清水 政明
	副 査 准教授 中嶋 善輝
	副 査 大阪外国語大学名誉教授 橋本 勝

論文審査の結果の要旨

本博士論文「モンゴル語の派生接尾辞 **-tu**, **-tai**, **-tan** に関する研究」は、モンゴル語の名詞類から名詞類を作る出名名詞派生接尾辞の一種で、<～のある、～を持つ>という所属・所有を原義にもつ三形式 **-tu**, **-tai**, **-tan** に関する共時的及び通時的的研究である。

現代モンゴル語では、これら三形式における基本的意味の差異はなく、**-t** は前後二つの名詞の結合度が強く主に定型表現として（例えば、**яс** (骨) **-t** (～のある) **мэлхий** (蛙) > **яст мэлхий** (亀)）、**-тай** は前後二つの名詞の結合度が弱く最も頻度が高く使用される（例えば、**сар** (月) **-тай** (～のある) **шөнө** (夜) > **сартай шөнө** (月夜)）他、さらに**-тан** はほぼ集合名詞形成（例えば、**оюун** (知性) **-тан** (～のある) > **оюутан** (学生)）に特化しているという役割の差異が見られる。また文の統語的特徴として、**-t** と**-тай** はともに $N_1-t N_2$, $N_1-тай N_2$ (N_1, N_2 は名詞類) が可能であり「限定用法」が許される点で共通しているが、文末での「述語用法」は **N-тай** は可能だが、**N-t** は不可能、つまり述語の位置に来ない (**Өнөөдөр** (今日) **хичээл** (授業) **-тэй** (～のある) > **Өнөөдөр хичээлтэй** (今日は授業がある) は可能だが、**Өнөөдөр** (今日) **хичээл** (授業) **-т** (～のある) > **Өнөөдөр *хичээлт** は不可である) という極めて弁別的な差異も見られるということが知られている。

候補者は、本論文で当該派生接尾辞の共時的立場からの議論を、「意味」と「相互間の差異と状況」の二つに着目し、前者においては、1. 否定の欠性接尾辞 **-гүй** との関連性、2. 存在の **байна** との関連性、3. 属格-**ын** との関連性の三点に、後者においては、1. 派生接尾辞 **-t** と**-тай** の差異、2. 派生接尾辞 **-тай** と共同格 **-тай** の差異、3. 派生接尾辞 **-тан** の状況の三点にそれぞれ言及し、従来の見解を踏まえながら、自身の考えを十分に展開している。いずれの箇所においても、現時点での共時的議論がほぼ尽くされており、論の進め方に無理なく説得力に富んでいる。

一方、13世紀の中世モンゴル語の代表的文献である『元朝秘史』では、当該接尾辞 **-tu**, **-tai**, **-tan** において、現代モンゴル語とは全く異なる言語的特徴、つまり「限定用法」における被限定詞、または「述語用法」における文の主語との間に「性と数の呼応」が見られ、**-tu** は「男性・単数」、**-tai** は「女性・単数」、**-tan** は「複数」という基本的原則があることが古くから知られている。例えば、**tere Jadaradai-yin kö'ün Tügü'üdei neretü büle'ë**. (そのジャダラダイの息子はトゥグウーデイという名を持っていた / **kö'ün** (息子) は「男性・単数」なので、**neretü** (名) **-tü** (～を持つ) となる [述語用法])、…**Alan-go'ā neretei ökin tere**. (アラン・ゴアという名を持つ 娘が彼女だ / **ökin** (娘) は「女性・単数」なので、**neretü** (名) **-tei** (～を持つ) となる [限定用法])、**Alan-go'ā …qoyar kö'ün töre'ülbi. (qoyar kö'ün) Bügünütei Belgünütei nereten büle'ë**. (アラン・ゴアは…二人の息子を産んだ。 (二人の息子は) **qoyar kö'ün** (二人の息子) は「複数」なので、**neretü** (名) **-ten** (～を持つ) となる [述語用法]) である。また文の統語的特徴として、「述語用法」として **N-tai** のみならず **N-tu** も述語の位置に来ることが可能であり、この点で現代モンゴル語とは異なっている。

候補者は、『元朝秘史』における「性と数の呼応」という基本的原則に関し、従来の小沢説に疑義を呈し、その真実の追究に博士論文全体のほぼ4分の1を割いて議論している。従来の小沢説によると、「被限定詞または文の主語 (明示・非明示のいずれも含む) が「人」の場合、**-tu** は「男性・単数」、**-tai** は「女性・単数」、**-tan** 「複数」という基本的原則は守られるが、「人以外」の場合、**-tu** は稀であり**-tai** が用いられることが多く、これは女性扱いされていたことを示す」というものである。

これに対し、候補者は『元朝秘史』に出現する当該三形式 496全例の索引と用例全例を掲げ逐一検証した結果、「人」の場合は、400例中380例、95%で「性と数の呼応」が守られている他、「人以外」の96例の場合でも、**-tu** 54例、**-tai** 27例、**-tan** 15例で、**-tu** が数的に優位であり、そのうち「動物」を除く「無生物のもの」だけでも、**-tu** 31例、**-tai** 27

例、-tan 9例とやはり -tu が多いことから、「人以外」が文法的に女性扱いされていたとする小沢説は、もはやその根拠を失うことになる。その結果、候補者は「人以外」の単数に関しては、-tu と -tai の使用に何ら規則はなく、自由交替可能な状態であり、-tu が数的に優位なのは「人」の場合に -tu が多いことに起因していると結論付けている。従来の定説を覆し、真実に果敢に迫ろうとする姿勢は、研究者として十分評価できる点である。

さらにこのモンゴル語における基本的原則の発生原因に関しては、モンゴル高原の諸部族を統一し、モンゴル帝国が建国されたことと直接関連し、言語の面にも大きな改新が生じたのではないかと見ている。『元朝秘史』には、動詞の語尾体系（終止語尾や一部の連体語尾）に、「男性（単数）・女性（単数）・複数」の三系列が見られるが、このことが当該の名詞派生接尾辞 -tu, -tai, -tan にも直接波及したものと推定している。

また、この基本的規則の消滅原因と時期に関しては、やはりモンゴル帝国の衰退とともに徐々に消滅したものと考えられるが、その時期は、17世紀の『黄金史』にも「性と数の呼応」の痕跡をとどめていることから、話し言葉では、小沢の主張するように15世紀には消失した可能性もあるが、書き言葉としては、17世紀にはまだ弁別が意識されており、18世紀に至り、書き言葉においても「性の呼応」が完全に消失したと見ている。

『元朝秘史』以前の文献とされる『知恵の鍵』では、-tu, -tai, -tan の三形式が実証されるが、当時はまだ -tu と -tai の間に「性の呼応」は確認できず、自由交替可能な状態であった他、-tan は複数表示であり「数の呼応」は以前からあったことがわずかながら確認される。

中世モンゴル語のその他の代表的文献に、14、15世紀の中世モンゴル語・西方言を代表する『ムカディマツト・アル・アダブの辞書』があるが、そこでは -tu 「単数」、-tan 「複数」の二項対立であり、*-tai は出現しないことから、当該方言では「性の呼応」はすでに消失し、「数の呼応」だけが保たれたものと解される。

さらに『元朝秘史』とほぼ同時期・同地域の文献にパスパ文字史料があり、パスパ文字は元朝百年の国字であったが、そこでは -tu 「単数」、-tan 「複数」の二項対立であり、同様に *-tai は出現しない。しかし、このことは「性の呼応」の消滅を意味するのではなく、-tai は存在し「性の呼応」は保たれていたものの、国字によって記された史料内容の制限により、単数では「人」の場合はすべて男性、「人以外」の場合でも抽象度の高いものであったため、結果的に一律 -tu が使用されたものと推定される。

17世紀の『アルタンハーン伝』、18世紀の仏典『宝徳蔵般若経』やメルゲン・ゲゲーンの『黄金史』に至っては、-tu と -tai の間にもはや「性の呼応」は全く見られなくなった他、-tu が述語用法として減少する一方、-tan も複数の呼応が衰退し、集合名詞形成の役割に特化し始める等、現代モンゴル語に確実に近づきつつあるが、-tu が依然として -tai よりも使用頻度が高い点のみ、現代語とは様相を異にしている。

その他、モンゴル語族（現代モンゴル系諸言語）全体から当該派生接尾辞 -tu, -tai の二形式の状況を、モンゴル語以外の方言で見てみると、-tu, -tai 併用型が 5言語（ブリヤート語、カルムイク語、オイラト語、ダグル語、互助土族語）、-tu 単独型が 4言語（バオアン語、ドゥンジャン語、カンジャ語、シラ・ユグル語）、-tai 単独型が 1言語（民和土族語）であり、併用型は、元来の -tu, -tai 自由交替可能な状態をそのまま継承した結果であり、-tu, -tai のいずれか単独型は、双方の一方が消失した結果と考えられる。全体としてはモンゴル語を中心に据えて見るならば、中央諸言語では併用型、周辺諸言語では単一型と大まかに言えそうである。

本博士論文のもう一つの重要な視点は、現代モンゴル語における名詞の派生接尾辞 -tai（～のある、～を持つ）と名詞の共同格語尾 -tai（～と一緒に）との関係の問題である。

共時的立場から見ると、一部では派生接尾辞を共同格語尾の一用法である、つまり共同格の発展形が派生接尾辞であると見る立場がある一方で、他方では再帰所有語尾の接続の有無（共同格語尾は再帰所有語尾 -aa⁴の接続可だが、派生接尾辞は再帰所有語尾の接続不可）の点で、両者は二つの異なる形態素であると見る立場もある。

候補者は、共時的には後者の立場を支持するものの、通時的には派生接尾辞 -tai（13世紀～）は、共同格 -tai（17世紀～）よりずっと以前に出現していることから、共同格 -tai の起源は派生接尾辞 -tai に由来するのであり、その逆ではないことを立証しており、13世紀前より共同格の意で使用されていた -luya（中世モンゴル語 -lu'ā / -lū'ē、一部連帯格 -la と呼ぶ者もある）が17世紀以降に -tai に取って代わり台頭するに伴い、派生接尾辞 -tai も18世紀以降に従来数的に優位であった -tu から徐々に取って代わられたものと推定している。

最後に本博士論文は、モンゴル語の派生接尾辞 -tu, -tai, -tan に関する共時的及び通時的研究であり、共時的には従来の議論を踏まえ自身の考えを展開するとともに、通時的には従来の小沢説を覆し、しかも共同格 -luya から -tai への台頭に伴い、中世モンゴル語の「性の呼応」の消失が引き金となり、現代モンゴル語で派生接尾辞が -tu から -tai に徐々に優位になっていったとする見解は、モンゴル言語学の当該研究に一石を投じるものと高く評価し、審査委員全員の意見の一致を見て、博士論文の成績を「合格」と判断した。